

水滴の家

鷺谷 みどり

ある日彼女は 霧の匂いのする夕食のあと
床下に穴を掘っていた
彼女が横たわることが出来るだけのそれを
モルタルづくりの彼女の家のすみずみに
彼女の不安の水がいきわたるように
いつか そこから
ふかい みどりの不安の木が
生い茂るように

木はどこまでも彼女の
新鮮な不安をほしがるから
彼女の小さな如雨露は
たちまち指先から空っぽになって
そのすきとおり方を皆に褒められながら
やがて みずみずしく したたり落ちていく
不安の果実に囲まれて
彼女は誰にも見えなくなった

私は叔母に会ったことがない
私が引き継いだこの家は
いつも内側からの わずかな雨に濡れていて
私の指など 素知らぬ顔で
木は ますます盛んに
暗く沈んでいく

叔母の口の中をいつも満たしていたという
うすにがいそれは
私の膜と決して交じり合うことはない けれど
とろけたビー玉のようなその実を
ふいに舌の上に乗せるとき
私はすこしだけ
叔母のまるく光る 白い皿の淵の
そのつめたい空腹に
からだを浸すことができた

家をななめに傾がせて
外へ大きくせり出した木は
風が吹くと カラカラと彼女の骨の音が鳴る
その音はしばらく
近所の子どもたちを
おびやかして
それも やがて消えていった